

氏名（本籍）	コ 胡	ギン 銀	ガク 岳	（中国）
学位の種類	博士（音楽）			
学位記番号	博音第90号			
学位授与年月日	平成19年3月26日			
学位論文等題目	〈論文〉京劇音楽から新しい作曲への敷衍			
論文等審査委員				
（総合主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	野田 暉 行
（副査）	〃	〃	（演藝芸術センター）	松 下 功
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	植 村 幸 生

（論文内容の要旨）

本論文は京劇音楽を研究し、筆者自身が創作思想を確立した上で、新しい音楽の創作を目指すことを目的にしている。

論文は主に3つの部分から構成されている。

「序 論」

序論は戯曲音楽概説であり、中国戯曲の歴史、地方劇などを概観的に論述する。その他に、場面設定、道具、演技、舞台と程式などに関しても触れ、京劇との関わりを探る。

「宋元南戯」、「元代雜劇」、「明清伝奇」、「清代花部」などを経て京劇へ至り、戯曲の理論体系も少しずつ成熟していく。伝統戯曲は後に京劇の形成へ大きな影響を与えた。

「本 論」

本論は音楽概論、音楽分析論、音楽応用論など3つの章から構成している。

概論の第一節には概説であり、昆劇から京劇へ与えた影響、京劇の起源、形成と発展、そして芸術特徴、楽器、行当、臉譜について述べた。

京劇は昆劇を含め、多くの戯曲要素を吸収した。形成と発展において、当時の政治、文化、商業と綿密につながっていると見える。京劇大師（役者と音楽師）と大衆が共同創作し、京劇の独特な特徴を形成した。楽器の種類が少ないが、弦楽器、管楽器や打楽器などがあり、その使用が洗練されている。生、旦、浄、醜（丑）の4種類タイプの“行当”に分けられ、それぞれの役を果たしている。“行当”に応じ、適切な臉譜が使われる。

第二節では、唱腔の基本板式、唱段の構成、板の転換について述べる。

京劇は基本的に“西皮”と“二黄”2種の腔調だけで、定式化された板式に基づいて構築される。また、板式も唱段も基本的に“原板”を手本にし、いくつかの板式へ変化させたといえる。

第三節では、唱腔の展開手法を論じる。

京劇は多様な表現手段を持っている。非常に誇張して“反復”や、“対比”、“頂真”などが行われる。その結果、聴衆に大きな印象をつけることができ、京劇音楽の発展に大きく貢献している。

第二章では京劇を代表する作品『四郎探母』、『霸王別姫』、『貴妃醉酒』を分析する。

上記の3作品について、音楽の構成、リズム、拍子、旋律、楽節、板式、手法など諸方面において、分析を行う。

『四郎探母』の音楽分析によって、いくつかの大事なことを得ている。

ひとつは劇的な構成である。例えば、「坐宮」の「西皮慢板」が入る前、引子の部分に「撒鑼」、「小鑼

帽子頭」、「念引子」、「小鑼帰位」、「念定場詩」（中間に小鑼住頭）を経て、「西皮慢板」に入る。また、「慢板」のフレーズの展開もA+B1+B2+B3+B4+B5という構成となっており、“B”の展開が独特であろう。

もうひとつは表現手法の多様化、適切化である。「なぞ当て」部分に“起承転結”の手法、「真相告白」部分に“対比法”、“3、2、1法”、“長短法”など使われている。

『霸王別姫』の音楽では、京劇の全体の構成を踏襲しているが、楽句の基本構成を変えた。これは歌詞や内容による可能性もあるが、京劇の役者は伝統の京劇音楽構成の変化を求めていると考えられる。

その他に、いくつかの重要な手法が使われている。“短縮法”、“合”の技法、“反復法”、“長短法”、“同歩換形法”などがある。

『貴妃醉酒』は一人芝居の劇ともいえ、その演技と音楽は非常に特徴を持っている。旋律曲線の美しい以外に、伝統の曲牌を大いに使われている。『貴妃醉酒』に非常に重要な手法である“頂真法”、“点綴法”が使われており、劇の音楽を大きく発展させた。

第三章では、京劇音楽の研究と分析を行った上、博士課程に在籍している間、創作した「融」と「剣の舞」の2作品を取り上げて論じる。

第一節では構成の応用であり、楽句（フレーズ）、楽段と曲全体構成についてどのように使われるかを論じる。

第二節では表現手法の応用であり、“反復”、“対比”、“合”、“3、2、1”などの表現手法が取り上げられている。

第三節では、数字と表現手法から得た啓示を新しい作曲への応用について論じる。

「結 論」

京劇の研究と分析を踏まえ、今後の創作につき、新たな創作理念を再構築し、新しいエネルギーへのアプローチを行い、次の点をもって本論文の結論とする。

1、新しい作曲を自国伝統音楽の精神的軌跡から切り離せない。

伝統戯曲から現在の京劇へ至った。自国の伝統の軌跡の上にし、新しい作品を創造すべきだと考える。

2、戯曲的な構成と内容を有し、独特で豊かな楽想を持つ。

目的を辿るまで、長い道のりがあり、目的地に着いたら、後味を与える。豊富な楽想を持つ京劇音楽のように、自作の創作に豊かな楽想を求める。

3、表現手段が多様化、適切化

京劇は外在的な手段と内在的な手法を用いる。未来作曲システムの構築に応用する。

4、音作りのシステムが暗示

京劇音楽から新たな音作りのシステムが暗示されている。固定した“7”、“10”、“13”、“4”などの数字や、“頂真法”と“点綴法”から“リレー音楽”や“レヤ音楽”への創作啓示が与えられた。